

〔南畝莠言〕下香月牛山名啓益卷懷食鏡西瓜の條に、啓益按、西瓜は寛永年中に、異邦より來れり、然れども義堂和尚の空華集に、和西瓜の詩あり、此時西瓜いまだあるべからず、しらす何物を以てこれを稱するや、或は此物古來ある所にして、其種亡びて近年亦異邦より來れるやといへり、

〔傍廂後篇〕西瓜

西瓜一名寒瓜といふ、西域より出でたる故に、西瓜といひ、冷なる故に、寒瓜といひ、水中に冷し食ふ故に、水瓜といふ、今は西字を水の音によめり、五雜俎に、大元世祖皇帝、征西域之後、此種入于中華、代醉四十云、五代史、契丹破回紇、因得西瓜、如中國冬瓜、而味甘、丹鉛餘錄に、據此謂西瓜、五代始入中國、故本草不載、水東日記に、西瓜、自大元大祖征西域、始得云々と見えたり、

西瓜栽培

〔農業全書三〕西瓜

西瓜、水の多き物なるゆへ水瓜と云にはあらず、是もと西域より出たる物也、故に西瓜の號あり、うゆる法、甘瓜にかはる事なし、種子下す時分も、大かた同じ、少遅も苦しからず、又苗をうへ置て、移しうゆるもよし、畦も區まぢも甘瓜より廣く、こやしもなる程多く用ゆべし、海藻ある所ならば、是を多く入たるがよし、區まぢごとに立をく數も、畦のひろきせばきにしたがひ、一本若は二本も置べし、多くはをくべからず、又子をば、一本に二つ三つまではをくべし、甚大なるを好まば、一つをきたるにはしからず、わきのつるも花も皆々つみ切べし、是は甘瓜のごとく、先を留る事はなし、無用のつるの出るをきりさるべし、其ま、置ば瓜ふとからず、甘瓜の終りて後熟し、味よく、暑氣をさまし、酒毒を解し、渴きをやめ、多く食しても人にたゝらず、いさぎよき食物なり、たねに色々ありじやがたらと云あり、肉赤く味勝れたり、是を專作るべし、海邊ちかき南向の肥たる沙地を好む物にて、山中など取分宜しからず、

〔甲斐國志百二十三〕産物及製造西瓜 本州ハ昔此物ナシ、享保三年、北山筋山宮村市郎右衛門云者、始獲種